

Title	Theo Surányi-Unger; Geschichte der Wirtschaftsphilosophie. 1931.
Sub Title	
Author	小池, 基之
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.9 (1932. 9) ,p.1468(100)- 1476(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19320901-0100
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320901-0100">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320901-0100</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## Theo Surányi-Unger; Geschichte der Wirtschaftsphilosophie.

1931.

## 小池基之

一般に経済学はその上限及び下限に於て一層根本的な問題、自己自らの認識目的及び認識方法に關する基礎概念並びに基礎原理を與へられたるものとして前提する以上、経済学は必然的に一定の哲學的理論との間に内面的、有機的關係を有せざるを得ない。こゝに経済哲學乃至經濟哲學的思索の存在の理由が存する。曩に浩瀚なる Philosophie in der Volkswirtschaftslehre. 2 Bde. (Bd. I. 1923. Bd. II. 1926) を著し、更に Die Entwicklung der theoretischen Volkswirtschaftslehre im ersten Viertel des 20. Jahrhunderts. 1927. に於て該博廣汎なる文献の涉獵と引用とによつて經濟學史乃至經濟哲學史上に貢獻したスラニイ・ウンガアは前掲 Geschichte der Wirtschaftsphilosophie. に於て要約的に哲學と經濟との間の交渉の史的發展を敘述してゐる。彼が本書に於て意圖した處は方法論及び價值判斷に對する論争を經濟哲學史に於ける著しき二つの問題として舉示するばかりでなく、經濟學と哲學との間に存する思惟範圍の發展を刺戟する二つの源泉であると爲すにあつた。彼は經濟哲學の本質及境界の不明確なる事を啓蒙時代の初期に於ける經濟學の哲學への没入にまで遡つて原因付けた後、經濟哲學的思索に對して二つの傾向を認める。即ち理論的に深く基礎付けられた經濟自身の學、就中理念型 (Idealtypus) 的な抽象によつて實際生

活の經濟現象から意識的に隔絶せる經濟關係に關する研究に對して、經濟的存在及び經濟的思惟に關しての認識に經濟哲學を基礎付けんとする立場にあつては、それは經濟學と哲學との中間に存する思惟範圍として構成されてゐる。此の場合「基礎付け」の手段としての哲學の任務を注意することによつて經濟學の論理的・認識論的且つ方法論的概念構成を持ち來すが、他方「個々科學の結果の綜合」としての哲學の意味に於ける經濟哲學は世界觀の一般觀點の下に於ける經濟理論の解釋を意味する。この意味に於て經濟哲學が獨立の學として存在を認められるに至つたのは近時の事であるにも拘はらず、あらゆる經濟理論は世界觀的從つて又哲學的核心を有するが故に、哲學と經濟學の綜合の歴史的認識即ち經濟哲學史は經濟學のこの核心による理論史的檢討に初めなければならぬ。

斯くしてスラニイ・ウンガアは第一章に於て「經濟哲學の本質と境界」の考察を爲した後に第二章に於て「經濟理論の哲學的基礎」に就いてのべてゐる。

重農學派の創始者ケネーの思想は一方には自然哲學に基礎を置いた目的論的・機械論的世界觀と他方にはギリシヤ以來の哲學的傳統殊に自然法の影響の下に經濟的自由の確信を抱いたが、スコットランドの道德哲學の影響をうけたアダム・スミスは重農學派の偏狹を脱して統一的國民經濟學の形成に赴いた。經濟哲學の見地からすれば重農學派及び古典學派は啓蒙時代の哲學にその根底を置いてゐるのであるが、啓蒙時代の思潮によつて喚び起された思想的反動は經濟學の發展の上に影響を及ぼさずには置かなかつた。その轉向を持ち來したものは獨逸觀念論である。カントに出發しフイヒテによつて發展せしめられたその思想はシェリング、シュライエルマッヘル、フリードリッヒ・シュレーゲルを通じて社會科學に影響を及ぼし、特に經濟學の範圍に於てはその浪漫的思想によつて、アダム・ミューラーの指導の下に勇敢なる改革者が構成された。彼等は抽象化・孤立化を排除し、經濟關係を有機的結合に於て、

文化發展の流れに於て把握せんとする所に古典學派に對する對立が看取せられる。歴史學派はこの浪漫主義者によつて企てられた有機的世界觀を採り入れると共に、一方にはコントの實證主義と他方には歴史法學によつて影響された。

古典學派が硬化状態に陥り歴史學派がその相對的研究を以て歩み出た時、理論的反應の一面として、マルクス主義は獨逸觀念論、佛蘭西啓蒙哲學及び古典學派の經濟理論を採り來つて自己の體系的秩序を構成した。更に他の一面として演繹的思維方法の復活は限界效用理論、經濟的均衡論、ケンブリッジ學派及びクラアク學派を齎らした。而して一方に於てマルクス主義自らの中に於て之に對する修正若しくは發展が存すると同時に、他方マルクス主義的經濟學に對する反對はマルクス主義を克服すると共に多くの經濟學體系を作り出してゐる。これ等戰後の經濟理論の主要傾向としてスラニイ・ウンガはカッセルの學說、リーフマンの理論、社會的法的學派、普遍主義及び制度主義を擧げてゐる。

シュモラー對メンガアの方法論争は經濟學方法論史上一定期を劃するものであつて、限界效用學說は經濟理論に於てのみならず又經濟學方法論に於ても一大貢獻を爲した。一方經濟的均衡論はコントの實證哲學の內面的影響によつて精密科學の確固たる核心を構成すべき純經濟關係の完成に向けられた。更に均衡論に於ける價格構成並びに所得分配の問題はスペンサアの進化論の影響をうくる事大であるが、その唯物論的・機械論的轉向を企ててゐるものが多い。

スペンサアの快樂主義的功利主義は又ジェボンスの傳統を繼ぐケンブリッジ學派に於て大なる役割を演じてゐる。今日に至るまで快樂主義的功利主義の傳統は英國經濟學の出發點と考へられてゐるのであるが就中シジュウイックは功利主義を直覺主義と經驗主義との基礎に置いた點に於て功利主義の歴史に重要な寄與を爲した。他方同様にその經濟思潮は限界效用學說と古典學派の修正とを基調とし従つてその哲學的背景として功利主義と快樂主義とを有してゐる米國の經濟學に於ては、傳統的な樂觀主義的基調を有する點にその特異性が認められる。この樂觀主義はジョナサン・エドワードの神學的形而上學的研究、フランクリンの自然科學的思想にまで遡ることが出来るが、更にそれは例へばクラアクの分配論に於ける限界生産力説の倫理的介在等に表はれてゐる。

經濟哲學は經濟的認識の論理的性質に關する批判的考察によつて大いにその發展を刺戟されたのであるが、此の點に於て新カント學派の二分派バーデン學派とマールブルグ學派の貢獻は大である。ヴィンデルバンドによつて開拓され、リッケルトによつて發展せしめられた自然科學と文化科學の方法論的區分、認識一般に於ける先驗的當爲の優位は經濟的認識の新方面を開いた。かくして彼等は經濟的文化價值を先驗的原理とし、經濟的認識が價值概念の構成を行ふ論理的機能を検討せんとした。他方コーヘン、ナトルプ、カッシラア及びその學徒は哲學の目的を個人の認識の成立を討究する事ではなしに、科學的經驗に對する論理的條件の説明に求めんとし、經濟理論の範圍に於て大なる意義を有してゐる。この點からカッセルは實證的實用主義の見地が強く且つリール、キュルペ等の現實主義哲學の影響の下に立つてゐるのではあるが、マールブルグ學派の根本原理をその基礎に藏してゐる。反之リーフマンは明らかにリッケルト、ミュンステルベルク、及びマックス・ウェーバアに基いてゐるが、又他方マールブルグ學派の重要な思想を受け繼いでゐる點に於て、彼の析衷的特徴が見られる。彼に従へば理論とは正當に認識された同一性の原則即ち費用と效用との比較に基いた經驗對象の體系的認識である。かくして經濟學の認識對象を貨幣經濟の現象に求め、ゴッセンに出發した限界收益均等の法則をその理論體系の根底に置いてゐる。

乍然マルブルグ學派の認識論的見地は社會法的學派の巨頭シュタムラーによつて社會哲學に適用された。彼は社會生活の特徴として外的規制即ち法的秩序を認め、この外的規制によつて社會生活は特殊の認識對象となるを得るのである。デイルはシュタムラーの基礎の上に經濟理論を發展せしめ、シュトルツマンは「全體的思想」と社會倫理的考量とから經濟哲學の體系に到達しやうと欲した。社會法的觀察方法に依るものであるが、一面バーデン學派の論理的概念構成を採り入れることによつてアモンは方法論争に於て有益なる仲介者の役割を演じてゐる。

シュタムラーの社會哲學に於ける目的論的傾向と幾多の接觸點を有し、獨逸觀念論殊に浪漫的哲學の流れを汲む經濟哲學思想は現今シュパンによつて代表されてゐる。尙彼の普遍主義哲學に於ては、ドリーシュに於ける有機的全體的目的論的思想が重要な役割を演じてゐる。

その間に米國に於ては制度主義派がシュパン及び歴史學派殊にヒルデブランドの有機的思想の影響の下に新傾向として發展した。更に制度主義者は新心理學——その源泉に於て英國の聯想心理學と獨逸の經驗心理學とが存するもの——の影響を受けてゐる。人間社會は無限に發展する心理的機構であり、理性は行爲に於て選擇的な役割を演ずるものであるが、人間の行爲形成の上に於ける理性の影響は文化の高まると共に増大し、こゝに人間の適合性が區別し得られる。此の場合には快樂主義の理論に於けるやうに初めから普遍妥當的な理性の法則が定められ、欲望、目的、手段、個人行爲の範圍方向等は絶えず多角的に變化發展する「制度的發展」の函數となるのである。この人間の經濟行爲と經濟組織、環境に關する相互關係の認識が制度主義派の課題である。

上に於て經濟理論の哲學的基礎付けについての史的發展の跡をたどつた。經濟理論は經濟現象の正當なる理解を

目的とするものであるのに對し、經濟政策は社會的目的に對して關心を有する。従つて理論に於ては哲學的考察は認識論的觀點として表はれるが、政策的目的設定に於ては直接世界觀的説明に依存する。第三章「經濟政策思潮の世界觀的出發點」はこの經濟政策の世界觀的説明の意義に關してゐる。

經濟政策の地位が依存するのは一般世界觀に於ける三つの哲學的要素にかゝる。即ち精神的及び物質的世界の本質、源泉、過程、並びに目的についての考察に従つてその形而上學的方面、生活目的の到達に對する倫理的、根本問題、而して社會的存在として人間社會についての觀念即ち社會哲學的考察の上に種々なる政策的目的設定、異なる經濟政策的傾向が生じて來るのである。世界觀は直接間接に支配的哲學思潮に歸着するものであるから、經濟政策的的目的設定への影響は結局これ等三つの哲學的要素の範圍に相應するものであり、この要素の問題範圍に異なる觀點は由來するのである。

例へば吾々はプラトニー、アリストテレースに於て觀念論的有機的觀點から價值多き經濟哲學的思索を見得るのであるが、尙それは形而上學的、特徴の著しい經濟政策思潮の例として挙げられてゐる。

中世に於ける支配的思想であるキリスト教の中には又形而上學的要素の強く含まれてゐるのを見る。即ちその根本思想は來世の觀念であり、俗世はその前提として見られてゐる。この蔑視すべき俗的生活に於ては唯純なるキリスト教的愛によりて導かれるとなす倫理的觀念が、來世の形而上學的思想と結合して支配的有機的社會觀察として表はれてゐる。従つてこの結果經濟政策は唯精神的利益の保護のみ向けられた。更に物質的富の輕視、キリスト教的愛、及び有機的社會觀は非實行的ではあるが共產主義的傾向に近付いた。

中世に於ける來世觀念の支配からの人間生活の解放に對する努力に於て近世初期の思想の特質が表はれてゐる。

この新時代に於ける改革運動には自然科学の著しき進歩が與つて力あるものと云ふことが出来るであらう。かくてマキアヴェリはこの指導的な新精神の下に中世の有機的社會觀に對して有機的國家觀を發展せしめた。中世の精神的社會的權力は俗的物質的權力に對立し、限りなき君主權力の設定と確保とを經濟學の範圍に於ける最高の限界とした。その具體的手段としての現はれは重商主義である。

斯くして國家が完全なる獨立、自由、統一の基礎の上に來、國民が道徳的に文化的により高い發展段階に到達するに至つて國民的思想は益々大なる反響を喚び起すに至つた。こゝにはフィヒテの煽動的文書に於ける愛國の精神の強調、歴史哲學に於ける愛國の思潮の強き支持、或はリストの「國民主義政治經濟學」等が擧げられるが、更にこれ等は保護關稅の辯護に對する種々なる論據、フッシントの經濟政策、國民社會主義的觀點に一聯の連鎖を持つてゐる。

これ等に對して倫理的觀點を強調するものとして英國功利主義の道徳哲學の上に立つて經濟的自由主義の批判を爲さんとしたシスモンディが擧げられてゐる。彼は最大多數の最大幸福の主張の下に經濟學を道徳的規範に無制約に従ふ倫理的科學と爲す事によつて社會政策的問題に興味を示した。シスモンディの學說の外に又倫理的立場から急進的社會改良に向けられた經濟政策的思潮が存する。空想的社會改良主義者として、フリーエは啓蒙思想家の倫理思想の上に、オーエンは社會教育の倫理的基礎の上に獨自の體系を樹立した。倫理學者の命題にして誤りなきものならば人間性質は強制又は意識的努力なくして經濟生活が正しき道に導かれる様に構成せられるであらう。社會正義の倫理的考察に出發した土地改革論者ヘンリー・ジョージに於てはアリストテレス的補正的正義が重要な武器として採られ、それに於て平等なる財の分配を要求し、且つ地代の課稅に確固たる基礎を見出した。反之自由主義の經濟哲學の基礎には、例へば古典派が自然法に依據する如く、社會哲學的見地が重要な位置を

占めてゐる。無政府主義は自由主義の發展擴張として見られてゐるが、その發展の上に深い印象を與へたブルウドンは古典學派と同様に佛蘭西啓蒙哲學の思想評價に向ひ、殊にコンドルセに對する注意は彼の人間文化の限りなき完成の可能及び必然性を以て社會改良に對する出發となさしむるに至つた。

かくて經濟理論と經濟政策との關係については「價值判斷に關する論争」なる表題を持つ第四章が之に充てられてゐる。この論争に於ける發展は之を二期に分つ事が出来る。自然法則、抽象的方法を排した歴史學派は相對主義、倫理主義に立つ事によつて、實在的認識と倫理的判斷とを混入した。即ち當爲の政策と存在の認識との間の關係は明確に規定せられることがなかつたのである。乍然發展の第二期に於ては關心は認識論的方面に向けられた。即ちマックス・ウェーバーは當爲と存在とを峻別する事によつて理論乃至政策の領域から價值判斷を排除し、科學的目的を以て因果關係及び目的手段の適合性の探究記述にあるとなした。經驗的現象を現實性に於て把握する爲に彼は理念型概念を構成し、之を客觀的認識の手段とした。マックス・ウェーバーによつて到達せられた同じ結果にデュルケムは他の根據から到達した。唯彼に於ては因果原則を社會學の構造に於ける可能なる指導的觀點として合理的方法に於て完成せんとするマックス・ウェーバーに對して、その中に經驗的假定を見てゐる。其の他クロイツェ、マーシャル、ニコルソン、或はコンモンズ等も亦純粹經濟學的見地を倫理的見地から區別しなければならぬ事を主張する。

戦前に於てはマックス・ウェーバーのこの傾向はゾンバルト、ポレ、ウォルフ、フォークト、アドルフ・ウェーバー、エレンベルヒ等によつて支持されたが、戦時及戦後の經濟的危機に直面して、それは彼等の經濟政策に對する輕率の點から批判された。價值判斷に對する批判者は此にコーン、シュペングラ、ケイラー、エンングレング

1等の「規範的」傾向からの攻撃を受けた。かくして経済問題の科学的論議から価値判断を除去することの不可能を主張することによつて、この二黨派の對立は獨逸經濟學界に於ける論争の中心となつた。

従つて現代に於ける經濟哲學の問題の一半は經濟學の構成的出發點を完成する思惟の手段を構成するものであり、他の一半即ち經濟的理論と他の社會諸科學の結果との結合は主として經濟的價值判断の問題に集中してゐる。更にその應用の可能性、程度を決定すると共に、經濟政策的目的設定を一般的世界觀に依存するものから區別する限界が示されなければならぬ。

以上その概略を述べた如くスライニ・ウングアは文獻史的に經濟哲學の史的發展を簡潔に叙述してゐる。たとへそれが「マルキシズムの經濟學の發展及び普及につれて、其の哲學的基礎の解明に對する關心が昂まり、唯物辯證法及び唯物史觀の立場から經濟學の方法を検討し、經濟生活の世界觀的意義を把握せんとする種々の努力」に對する叙述を缺くとは云へ、吾々はこれによつて經濟學と哲學との交渉の發展の跡を明確にたどる事が出来るであらう。乍然一文化面としての經濟思想乃至哲學思想はある一定の社會生活を地盤とした上層建築、イデオロギーである。この社會意識形態の歴史に根據を與へるものは唯物史觀でなければならぬ。「個々の人間がその内にあつて生産する所の社會關係、即ち社會生産關係」とその上層建築、イデオロギーの歴史的・社會的交流を分析し、その交互作用による成果を顧ることによつてそれはより明確な認識に到達することを得るであらう。

### 最近經濟文獻

#### 〔理論經濟學〕

- \*經濟學の根本問題—マルクス主義經濟學方法論の諸問題 河野重弘譯 四六判、四七五頁 共生閣
- \*經濟學の基礎知識 高橋龜吉著 四六判、五三三頁……千倉書房
- \*資本論體系(上) 向坂逸郎、樺田民藏著(改造社經濟學全集十卷)四六判、三九四頁 改造社
- \*經濟學辭典(上)(改造社經濟學全集、五六卷)四六判、四二四頁……改造社
- 經濟に於ける勢力(經濟論叢、三五卷二號、昭和七・八、二二—三九頁) 高田 保馬
- 總體經濟と個別經濟(上)(經濟論叢、三五卷二號、昭和七・八、九—一〇六頁) 大塚 一郎
- ゴットル經濟學より觀たる國民經濟及世界經濟統體概念(國民經濟雜誌、五三卷二號、昭和七・八、二—一四五頁)……生島廣治郎
- 労働價值説の諸問題(三田學會雜誌、二六卷八號、昭和七・八、七五—一二〇頁) 伊東 岱吉
- 貨幣の資本化に於ける辯證法(ヘーゲル及辯證法研究、三七號、昭和七・八、一一—二二頁) 三枝 博吉

最近經濟文獻

一〇九 (一四七七)

- マルクスの貨幣理論(H・ブロック)(商學討究、七卷上册、昭和七・六、九—一三〇頁) 大野 純一
- 資本論歪曲の再生産(社會、一卷二號、昭和七・七、三三—三七頁) 仙田喜三郎
- マルクス絶對地代論解釋に關する若干の疑問(社會、一卷二號、昭和七・七、九—三二頁) 古澤 有造
- ウェーバー立地論に於ける残れる問題(商業と經濟、一三年一冊、昭和七・七、二四五—三〇二頁) 伊藤 久秋
- 恐慌からの道(エミール・レーネラー)(商業と經濟、一三年一冊、昭和七・七、三四—三七〇頁) 新川 傳介
- 恐慌の現段階を示す二三の性質に就て(理想、三三號、昭和七・七、二九—四三頁) 阿部 勇
- 永續的販路停滯と資本形成(經濟時報、四卷五號、昭和七・八、五七—七二頁) 豊崎 稔
- \*Gesell, S.: Die Ausbeutung, ihre Ursachen und ihre Bekämpfung. Eine Gegenüberstellung meiner Kapitaltheorie und derjenigen von Karl Marx. Bern. 1932. 48 S.
- \*Lange, O.: Die Preisdispersion als Mittel zur statistischen Messung wirtschaftlicher Gleichgewichtsstörungen. Leipzig. 1932. 56 S.
- \*Schneider, E.: Reine Theorie monopolistischer Wirtschaftsför-